コミュニティ・ラーニング報告

村の誇りを育む

震災から９年目を迎える野田村における新たな復興の在り方

青木 霞穏（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）
大川 ヘナン（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）
瀧尻 和子（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）
張 程皓（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）
閔 雅利（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）
藤井 伸二（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）
村上 太一（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）
叶 惠婧（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）
林 津如（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）

目次

1. はじめに
　1.1 はじめに
　1.2 メンバー紹介
　1.3 調査概要と目的
2. 野田村の概要
　2.1 地理的紹介
　2.2 人口
　2.3 産業
　2.4 地震・津波・台風
　2.5 年間イベント
3. 各班での活動報告
　3.1 観光班
　3.2 伝承班
　3.3 トレイル班
4. 全体考察―野田村の復興を考える
5. 野田村と私たちのこれから
謝辞
引用文献・参考文献
おわりに

キーワード

災害
復興
観光
伝承
トレイル
誇り

大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム／人間科学未来共生博士課程プログラム；info@respect.osaka-u.ac.jp

1.はじめに

1.1 はじめに

東日本大震災から9年が経とうとしている。東北地方を襲った未曾有の大地震もいつしか人々の記憶の中で過去のものへとなりつつある。一方で災害を体験し、大切な人、家、さらに思い出を奪い取られた被災者の方々にとっては常に人生の一部としてその記憶と付き合っていかなければならない。大きな被害を受けた野田村もハード面での復興は進みつつあるが、生き残った人々の教訓をどのようにして伝承してゆくのかが次のステップとなりつつある。

このような背景から、今年の「コミュニティ・ラーニング」のテーマは「野田村の復興にあたって」となった。ハード面で進みつつある復興に対して、生きている人々が今後どのような形で各々の「復興」を捉えていくのか、震災の記憶を如何にして後世へ伝えていくのかが、大きな目的である。そして、その大きな目的の下で3つの班に分かれることとなった。

本稿は野田村における8月17日から25日までの9日間の活動と、その後の考察をまとめたものである。第1章では各班の参加者の紹介、および調査概要とその目的を述べる。続く第2章では、野田村がどのような地域であるのか、その概要を示す。第3章では各班の活動内容及び報告会での報告内容についてまとめる。最後に、第4章と第5章ではこれまでの活動に基づいた全体的な考察を行った後、私たちの考える野田村の復興についての意見をまとめる。

1.2 メンバー紹介

【観光班】

叶　惠婧（よう　けいせい）ホヤラーメンのホヤが食べられなかった人

人間科学研究科　社会心理学

研究分野：SNSにおける偽り自己とメンタルヘルスの関係

林　津如（りん　しんじょ）料理がみんなから絶賛された人

人間科学研究科　文化人類学

研究分野：中国の芸能人のファン・コミュニティに対する人類学的思考

閔　雅利（びん　がり）一番歩くのが早い人

人間科学研究科　共生行動論

研究分野：SNSと災害ボランティア活動との連携

【トレイル班】

瀧尻　和子（たきじり　わこ）絵でみんなを驚かせた人

人間科学研究科　共生社会論

研究分野：大阪の教育政策

青木　霞穏（あおき　かのん）途中から髪型が変わった人

人間科学研究科　教育工学

研究分野：アクティブ・ラーニングと自尊感情の関係

大川　ヘナン（おおかわ　へなん）とにかく騒ぐ人

人間科学研究科　共生社会論

研究分野：在日ブラジル人の子どもの教育問題

【記憶・伝承班】

村上　太一（むらかみ　たいち）話の長い長身マン

人間科学研究科　福祉社会論

研究分野：子どもの居場所と居場所における支援のあり方

藤井　伸二（ふじい　しんじ）早寝早起き現役高校教師

人間科学研究科　教育文化学

研究分野：人権教育と地元高校

張　程皓（ちょう　ていこう）一番真面目だけど最後はおかゆになった人

人間科学研究科　教育工学

研究分野：情報技術は如何にして教育現場での問題を解決できるのか

1.3 調査概要と目的

今回は「野田村の復興に向けて」という大きなテーマのもと、8月17日から25日までの9日間を野田村で過ごした。私たちは3つの班に分かれて、特定の地域ではなく、「観光」、「伝承」、「トレイル」というテーマで班ごとに活動を展開した。

8月17日の午後、私たちは野田村に到着した。まず各班のキーパーソンの方を訪問し、簡単な打ち合わせをした。翌日18日の午前、私たちは久慈駅から三陸鉄道の震災学習列車に乗った。説明を担当する畑田健司さんは、震災時の状況の写真を見せながら、とても心に響く話しを聴かせてくれた。その日の午後、全員

写真 1　BBQ パーティーを楽しんだ皆

で野田村に戻り、これからの調査に向けて、各班のキーパーソンとインタビューを兼ねて打ち合わせした。その後、19 日から 22 日までの 4 日間にかけて、3 つの班はそれぞれの調査に入り、村の所々に訪問したり、関係者の方々にインタビュー調査をしたりした。23 日の午前、大阪大学の教員や学生、村役場の方々に向けて、成果発表を行った。午後、関西の放送局でアナウンサーを勤めている戸石信泰さんにラジオ放送に関する講義をしてもらい、「のだむラジヲ」の準備をした。24 日、野田まつりの手伝いも含めて、本番の「のだむラジヲ」を迎えた。

2. 野田村の概要

2.1 地理的紹介

野田村は岩手県九戸郡に属している村である。村は岩手県北東部に位置し、東は太平洋に面し、北部と西部は久慈市に、南部は普代村と岩泉町に接しており、総面積は 80.80km^2 である。全般的に山地であり起伏が多い地形であるが、村北東部の宇部川の谷底や中部の根井付近の台地は起伏がゆるやかになっている。海岸沿いを南北方向に三陸鉄道リアス線と国道 45 号が縦断し、環境省「みちのく潮風トレイル」の一部分となっている。

野田村の中心部は愛宕神社、海蔵院付近を中心とした「城内」と呼ばれている地域であり、役場、図書館、商店や飲食店などが立地する。愛宕神社の大鳥居は遠くからも見ることができ、村のシンボルにもなっている。東部には紫色の小豆砂を特徴とした砂浜の十府ヶ浦海岸が広がっており、海産物が非常に豊かである。南西部は山間地域となっており、淡水魚が豊富な安家川が流れているほか、村で最も高い和佐羅比山もこの地域に位置する。

2.2 人口

総務省の「平成31年度1月1日住民基本台帳年齢階級別人口（市区町村別）」によれば、2019年1月1日時点での野田村の人口は4,240人となっている（岩手県政策地域部 2018: 18）。そのうち65歳以上の人口は1,544人であり、総人口の約36.4%を占めている。これは日本全体の高齢化率28.1%（内閣府 2019）と比べても高い値である。

2.3 産業

沿岸部では漁業が盛んで、荒海ホタテやワカメなどの海産物が有名であり、そのほか地域の山葡萄を原料としたワインなどの販売も行っている。こうした特産品は観光物産館「ぱあぷる」で販売されており、当該地は特産品の周知において拠点としての機能を担っている。

また、電力の地産地消として2016年6月13日より株式会社野田バイオパワーJPによる木質バイオマス発電の試運転が開始されている。野田バイオパワーJPは再生可能エネルギー事業の推進はもとより、震災で多大な被害を被った地元での直接雇用の創出や、燃料の運搬や製造に伴う間接雇用の創出に貢献している。さらに、木材を長期的かつ安定的に利用することによって県北地域の林業に貢献しており、野田村の復興事業の目玉となっている。現在40人の雇用を創出している。

2.4 地震・津波・台風

北米プレートに太平洋プレートが沈み込んで日本海溝を形成している東北沖では、周期的に大津波が起こるといわれている。

2014年、野田村米田海岸の露頭の地層の発見を新聞が報道した。研究者は「野田村への大津波は、宮古市以南よりも2倍程度多い回数襲来していることが分か

る。2011年の震源より北の震源からも襲来しているからだ」と分析している（岩手日報 2017）。

記録の残っている明治以降の地震、津波、台風10号について記述する。

明治三陸地震津波：　明治29（1896）年6月15日、岩手県東方沖合を震源とするマグニチュード8.2の地震が発生。野田村で震度2の揺れを観測、津波が到達し死者261人（人口2,590人）、流出家屋138戸（世帯数411戸）という被害を受けた。

昭和三陸地震津波：　昭和8（1933）年3月3日、岩手県東方沖合を震源とするマグニチュード8.1の地震が発生。野田村で震度5の揺れを観測、津波が発生し死者6人（人口4,264人）、流出家屋58戸（世帯数572戸）という被害を受けた。

チリ地震津波：　昭和35（1960）年5月23日、南米チリ中部沿岸を震源とするマグニチュード8.5の地震が発生。太平洋を横断した津波が日本の太平洋岸に到達。野田村における死者は0人、倒壊、流出家屋は20数棟であった。

十勝沖地震津波：　昭和43（1968）年5月16日、青森県東方沖を震源とするマグニチュード7.9の地震が発生。野田村で震度4を観測した。動力船33艇、無動力和船61艇の損害。

東日本大震災津波：　平成23（2011）年3月11日、宮城県仙台市の東方沖を震源とするマグニチュード9.0の大地震が発生した。野田村で震度5弱を記録し、最大約18mの津波が襲来、死者37人（村民28人、村外9人）、行方不明者0人（人口4,849人）、住家被害515棟（世帯数1,674戸）、村内11か所の避難所に912人が避難した。

平成28（2016）年台風10号：　2016年8月30日、台風10号が岩手県大船渡市に上陸し、野田村内全域の1,653世帯、4,416人に避難勧告が出された。東日本大震災で破壊された、下安家川の国道、県道、村道の三つの橋とサケ・マスの孵化場は再建されていたが、二回目の被災となった。

2.5 年間イベントと野田まつり

2.5.1 年間イベント

野田村では、一年中でいくつかのイベントが開催されている。表1は、それらのイベントの内容、開催日時などについて、紹介するものである。

表１　野田村の年間イベント

	小正月行事	１６日市	塩の道を歩こう会	愛宕神社例大祭——野田まつり	秋のスマイル大収穫祭　うんめぇ～ＮＯＤＡまんぷくマルシェ／村総合文化祭
紹介	お正月の終わりに、伝統行事を行い、無病息災・五穀豊穣を祈念する行事	郷土料理を売るお店、野菜や花を売るお店等々が並ぶイベント	古来から伝わる製塩の歴史を学びながら「塩の道」を歩くウォーキングイベント	山車と、地域の御輿の運行をはじめ、踊りや太鼓・ステージイベント・懸賞付き大盆踊り大会などを含む多彩なイベント	野田村ならではの秋の産物・味覚が満載の「ＮＯＤＡまんぷくマルシェ」（旧「野田産業まつり」）
開催日時	1 月 15 日	毎月 16 日 ※ 1 月は小正月、8 月は盆前開催	年 2 回 ※ 5 月中旬・9 月下旬）	8 月 24 日前後の金・土・日	11 月上旬
主催	野田村むらづくり運動推進協議会 野田村役場総務課	野田村役場産業振興課	◎主催： 野田・塩の道を歩こう会実行委員会 ◎協力： 野田村、野田村観光協会	◎主催： 野田まつり実行委員会 ◎主管： 野田村商工会 ◎後援： 野田村・野田村観光協会	◎主催： NODA まんぷくマルシェ実行委員会 ◎共催： JA 新いわて野田支所

出典：野田村観光協会ホームページ；一部は筆者編集

2.5.2 野田まつり

野田まつりは、愛宕神社の例大祭で、野田村を代表する夏まつりである。毎年8月24日前後の金・土・日に、村役場の前にある村民広場と愛宕神社の周辺で開催される。

今年は23、24、25日に開催された。まつり期間中の三日間は「お通り」、「中日」、「お還り」と呼ばれ、神事とともに様々な催しが行われる。山車・神輿の運行、民謡・歌謡ショー、児童・生徒の合奏団と吹奏楽部の演奏、太鼓とよさこいソーラン、懸賞大盆踊り大会、ダンス公演、山車競演、有名人たちのライブ＆トークショー、花火打上げなど様々なイベントが行われ、まつりを盛り上げる。

さらに、大鳥居をランドマークとする愛宕参道広場と市民広場には屋台が並び、

唐揚げや焼き鳥など、まつり恒例の食べ物はもちろん、ホタテ焼き、豆腐田楽、田舎そば、山ぶどうワイン、といった当地の物産を中心にした様々なグルメを味わうことができる。また、地元名産の美しい宝石を掘り起こし放題という体験イベントもある。

今年の抽選会では、私達のグループ9人のうち7人に当たりが出て、たくさんの景品をいただいた。

写真２　豊富な景品をいただいた学生たち

3. 各班での活動報告

3.1 観光班

3.1.1 フィールド概要

観光チームは野田村の沿岸部を中心に、9日間にわたりフィールドワークを行った。観光チームの活動を3つのキャッチフレーズにまとまると、「食べる、走る、のだる」になる。「食べる」と「走る」というのは、地元の自慢料理を食べることと自転車で走ることである。「のだる」というのは方言ではなく、一つの造語である。ここではのんびりしている野田「のだ」という意味を表している。今回偶然、観光チームのメンバーは全員中国人である。野田村が2020年東京オリンピックの台湾のホストタウンということもあり、村の外から来た人の視点というよりかは、国際的な視点を意識して調査を行うことになった。

表２　観光班の活動概要

日程	時間	場所	内容
8月18日	9:00-11:30	北三陸鉄道リアス線沿線	畑田健司さんから震災のこと、北三陸鉄道リアス線の歴史を学んだ
	14:10-15:10	平谷さんのログハウス	平谷東英さんにインタビュー
8月19日	10:00-12:00	海岸線に沿って地下博物館まで	サイクリング
	12:00-13:00	マリンローズ	地下博物館に参観した
	13:30-14:20	道の駅	佐々木陵太さんにインタビュー
8月20日	10:30-11:10	道の駅	北田晴子さんにインタビュー
	11:23-11:50	野田道の駅ばあぶる二階	野田塩ラーメンを味わった
	11:50-12:00	産直ぱあぷる	地元生産品を見学した
	12:00-12:20	お魚センター	野田村の海産物を見た
	12:20-12:45	キッチンの栄	ホタテラーメン
	13:00-13:10	スマイル直売所	野田村の農産物を見た
	13:00-14:00	野田村役場	北田圭太さんにインタビュー
8月21日	9:10-10:30	平谷さんのログハウス	平谷さんにインタビュー
	11:00-13:30	魚の番屋	館内見学と館長深渡さんにインタビュー
	13:30-14:30	えぼし荘	南福来豚を味わった
		野田村役場	廣内鉄也さんと島川英知さんにインタビュー

3.1.2 活動内容

私たちは国際的な視点から野田村を観光した上で、新たな野田村の魅力を見出したいと考えた。そのために、まず、野田村の全体的なイメージを村民にインタ

ビューし、その後野田村の隅々まで観光した。さらに、村の観光に長く携わっている人々にインタビューを行い、もっと野田村の良いところを活かせるような企画を提案したいと考えた。

3.1.3 私たちの気づき

野田村は海と山に抱かれ、綺麗な自然景色が溢れ、風光明媚な土地である。さらに、野田村は豊富で、高品質な農産物と海産物を持っている。今回のフィールドワークを通して、野田村の観光について、四つのところに気づいた。一つ目は、美食に関する関心の不足の問題である。中国人向けのアンケート調査の結果により、野田村の風景などを含む観光スポットの中に「美食」に多大な興味を持っている人数が圧倒的に多いことがわかった。しかしながら、村の売りとして宣伝する際、ホタテと塩のソフトアイスクリームには力が入れられているが、他の特産品には工夫がそのようになされていない。それゆえ、野田村の売りとして、食べることに工夫する必要性を感じた。二つ目は、不便な交通網と車社会の問題である。野田村では、公共交通機関はバスと電車があるが、数が少ないといった問題を抱えている。ツアー客は観光バスで移動することができるが、車を持っていない観光客は、バスか電車を待つか、もしくは他の移動手段を模索する必要がある。もちろん、歩くことは可能だが、山道の多い野田村において徒歩での移動は現実的に困難である。その交通の問題を解決するために、健康にも自然にも優しい自転車の活用を考えているが、今の野田村は車社会で、住民たちは自転車に対する意識があまり高くない。それゆえ、自転車を利用する意識を上げ、自転車の普及を促すことが重要ではないだろうかと考えている。三つ目は、村の発信力の不足の問題である。昨今、ツイッターやインスタグラムなどのSNSが非常に流行している。国土交通省観光庁が公表している平成 29 年の「訪日外国人消費動向調査」年次報告書では、出発前に役に立った旅行情報源の回答としては、「SNS」が30.3％を占めており、「個人のブログ」の55.5％についで2番目となっている。ところが、現在、野田村のSNS上の宣伝について、ツイッター公式アカウントを運営しているのは観光協会だけであり、野田村に関する情報発信が少ない。そのため、SNSを利用して、村の発信力を上げることができないだろうかと考えている。四つ目は、ほたてんぼうだいの活用の問題である。ほたてんぼうだいの近くに記念碑が設置され、震災学習のルートに含まれるが、館内には震災に関する展示品が少なく、普段はただの休憩所として使われている。その代わりに、多く

の震災学習の資料は保健センターに保存されている。このままでは大きな役割を果たすべきほたてんぼうだいはちゃんと機能していない気がする。

3.1.4「食べる」「走る」「のだる」

前述した四つの問題点に対して、「食べる」「走る」「のだる」という三つのキーワードに基づき、三つの提案をあげた。まずは、地元の素材を使っている専門の料理屋や、村として出している季節限定地元料理といった豊富なグルメを活用することと、サイクルとグルメを組み合わせた、グルメバイキング（Gourmet＝biking）大会の提案である。さらに、SNSの宣伝の促進について、観光客も村の住民たちも自分のSNSのアカウントで村のことを投稿して、無料の引換券を手に入れるという提案がある。最後の提案は、ほたてんぼうだいの中に震災の資料やビデオなどを一部設置したり、展望台と記念碑での学習が終わった後、保健センター（復興展示室）まで案内したりすることで、ほたてんぼうだいと保健センターの連動を通して、震災学習コースをもっと活用することである。しかも、その2か所は震災学習の時だけではなく、日常生活の時にも交流の拠点として使うことが可能であると考えている。

野田村の観光は、観光客や旅行者だけではなく、野田村の住民たちも巻き込むものと言える。野田村は観光によって、様々なメリットが受けられる。まずは、観光のおかげで、交流人口が増加して、イノベーションが創出されやすい。次は交通や通信を含む公共施設が整備されるし、それらの整備によって、生活の利便性が上げられる。さらに、観光資源としての伝統文化や自然の保護保全の意識が高くなり、イベントが盛んになることが期待できる。他には、観光によって、住民の地元への愛着が高まり、地域に対する誇りが生まれ、地域の一体感が高まることが想像できる。また、観光を通して、住民と住民および住民と観光客との間で絆を築くことが可能になり、生き生きしている社会的ネットワークを構造することが可能になる。

3.1.5 のだむラジヲ

最後にのだむラジヲの20分間で私たちのこれまでの活動を報告した。朝日放送テレビ局の戸石さんが司会をし、平谷さんがゲストとして出席してくれた。前半の10分間は、村の名産品について様々な話をした。後半は、ゲストの平谷さんの紹介から始まり、その後、観光チームのSNSの活用、ママチャリ活動（自

表３　ラジオ放送の概要

番組時間：2019 年 8 月 24 日（土）　13：00 ～ 13：20
ゲスト：平谷東英さん
流れ：■　フィールドワークで学んだことの報告
　　■　平田さんのお話：野田村の観光について
　　■　各提案についての説明
　　■　活動全体の感想
　　■　楽曲：「shape of you」

転車の活用）、ほたてんぼうだいの活用という3つの提案をシェアした。そして、平谷さんから観光チームの提案に対して、高齢者を含めてSNSを使わせることと、自転車を用意して人々を集めた上で各店舗の協力をもらえることを実現するにはまた検討する必要があるなど、貴重なアドバイスをもらった。今回の放送では、観光チームが村の方々に感謝の気持ちを伝えるだけでなく、私たちからのささやかな刺激で村の皆さんが村への愛着をもっと深めることができればというのが私たちの思いである。

3.2 伝承班

3.2.1 はじめに―「伝承」から復興を考える―

2019年度コミュニティ・ラーニングは「野田村全体の復興」について考えることを大きなテーマとしていた。しかし、「伝承」と一口にいっても、誰から誰への伝承なのか、また何をどのように伝承するのかを考えた時、そのテーマは大きな広がりをみせる。それゆえに、私たち3人も随分と頭を悩ませたが、最終的には「復興マップ」をつくるという方法を提案した。

提案に至った経緯とその意義について確認する為に、次項以降では、まずフィールドワークの内容や私たちの気づきについて紹介したい（3.2.2）。続いて、フィールドワークを踏まえた上で、私たちがどのような課題を設定したのかを整理し（3.2.3）、最後に「野田村全体の復興」につなげるための提案として、「復興マップ」に私たちが込めた思いについて論じたい（3.2.4）。

3.2.2 野田村での９日間－調査内容の紹介と私たちの気づき－

伝承班は8月18日から8月21日にかけて、合計7名の方にインタビューをすることができた。それらすべての語りについて触れることができないのは心苦し

表４　伝承班の活動概要

日程	時間	場所	内容
8月18日	午前	三陸鉄道・震災学習列車	貫牛さん・畑田さん
	午後	車で村の見学	貳又さん
8月19日	午前	保健センター	復興展示室
	午後	のんちゃんハウス	班内会議
		震災復興勉強会 村役場	室崎先生・小林先生 貳又さん
8月20日	午前	保健センター震災展示室　村の見学	吉田さん
	午後	のんちゃんハウス	神先さん
8月21日	午前	三陸鉄道・本社	畑田さん
	午後	野田港、愛宕神社、海蔵院	

いが、ここでは震災ガイドである吉田照夫さんと野田村役場の貳又正貴さんの語りとその内容を紹介したい。

なお、フィールドワークの概要については表４に示した通りである。

ｉ）吉田さんの語り－震災の教訓－

吉田さんは、東日本大震災時の一場面として次のような事があったと振り返る。

> いったん避難した後、ペットを家に置き忘れた、ストーブを切り忘れた、と避難所を出て行った人が津波に巻き込まれたと聞いている。また、自分はもう死んでもいいから避難しない、と動かなかった人が津波にのまれた。死んでもいいというのは本意ではなく、おそらく、絶対に津波は来ない、と考えていたのだと思う。
>
> 2019/08/20フィールドノーツより

当事者と対面し、こうした語りに触れた時に心が動かされた感覚が、今でもよみがえる。それと同時に、震災や津波の恐ろしさと後世の人が同じ轍を踏まないための事例を「震災の教訓」とした上で、それらを伝承していくことの重要性を再認識した瞬間でもあった。

ⅱ）貳又さんの語り－記念碑に込めた思い－

ハード面の復興事業に一定の進展が見えるようになった2016年、野田村歴史の会を中心にした有志から「東日本大震災津波記念碑」（写真3）建立の計画が持ち上がった。記念碑づくりに携わった貳又さんは、そこに込めた思いについて次のように説明する。

> 東日本大震災記念碑（平成30年3月11日除幕）の足元の丸い石は守るべき命、三枚の板は未来へのゲートを構成し、一枚目は一つ目の防潮堤である14m防潮堤、二枚目は二つ目の防潮堤（三陸鉄道、国道45号線）、三枚目は十府ヶ浦公園の第三の防潮堤をモチーフにしている。
> 高さは（3月11日にちなんで）台座の下から311cm。未来へのゲートである、と同時に亡くなった方と生きた者との境をも意味している。
> 三つの保育所の年長組の園児の皆さんに来てもらって、被災された世帯数を表す数の石を置いてもらった。年長組の園児の皆さんがおじいちゃ

写真３　東日本大震災津波記念碑

んになった時、お孫さんに、これはおじいちゃんが置いた石だよ、と話しかけてくれるような、そういう企画を考えた。
現在の公園内にはゆかりの品々を納めたタイムカプセルも埋設してある。たとえば景色を見に来てもらえるだけでもいいし、口コミでも長らく記憶される場所になってほしい。

2019/08/19フィールドノーツより

記念碑に込められた工夫や、貳又さんの「長らく記憶される場所に」という言葉は、伝承において「伝え続ける」ことの重要性を私たちに教えてくれているようだった。また、印象的であったのは、私たちのうちの一人が「(記念碑を前にして)どうふるまえばよいか、複雑だ」と述べたところ、貳又さんが「あまり深刻に考えないで、前向きに捉えてほしい」と言っていたことである。

3.2.3 考察―インタビューからみえてきた伝承の課題

3.2.3.1 課題1 語り手の不足

インタビューを通じた多様な語りに触れた際、心が動かされる瞬間があった。それは、震災体験に関する客観的な情報で構成された「公的な語り」ではなく、自分自身の体験にもとづく「私的な語り」に触れたからだと、私たちは考えている。

しかし、現状として語りの担い手は多くはなく、野田村観光協会の話では、2019年8月時点で震災ガイドとして登録されているのは3人のみであった。では、当事者から次なる世代への伝承を考慮した時、「私的な語り」を蓄積するための方法としてどのようなものを提案できるだろうか。

3.2.3.2 課題2 何を伝承するか

何を伝承するかについて、当初は「震災の教訓」に焦点を絞っていた。それは、当事者による多様な語りを集め記録することが次なる災害への備えになると考えたこと、またフィールドワークを通じてその必要性を感じていたからだ。

しかし、村民の方々との会話のなかで、貳又さんも語っていたように「前向きに捉えてほしい」という言葉に触れることが度々あり、何を伝承の内容とすべきか、その答えを見出せずにいた。

この「前向きに」の意味を十分に解釈しきれないまま野田村での1度目の報告会

を迎えたが、その時ある役場の方が発した言葉に私たちはハッとさせられた。

> 震災があってよかったとは思わない。だけど、震災の後もいいことはたくさんあった。悲惨な面だけではなく、村民が誇りを持てる内容も発掘し伝承してほしい。
>
> 2019/08/22フィールドノーツより

私たちが震災をデリケートな出来事として扱い気を使うあまり、かえって当事者である野田村の人びとを「被災者」という枠組みだけで見てしまいがちであったことを痛感した。同時に、震災の教訓のみならず、野田村の「誇れる」側面を伝承の内容として含めることが、村にとって意義ある提案をするための第一歩だと強く感じた。

3.2.4 提案―伝承・復興を続けていくー「復興マップ」づくりを通じてー

ここまで、フィールドワークを通じて設定した伝承の課題について整理してきた。本項では、それらの課題に対してどのような提案ができるのかについて述べていきたい。

3.2.4.1「復興マップ」の概要

「震災の教訓」や野田村の「誇れる」側面に関する語りを蓄積するための方法として、私たちは「復興マップ」を活用することに決めた。「復興マップ」とは、あるテーマを決めたのち、それに関する情報を村歩きや道中出会った人との会話を通じて収集・整理し、マッピングしていくものである。

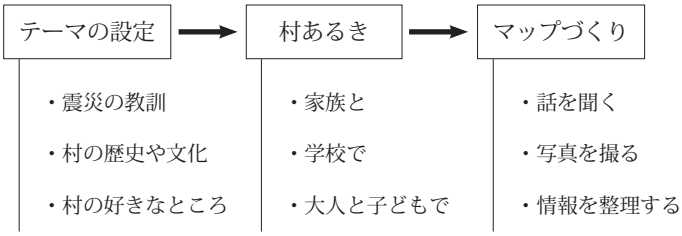

図1　「復興マップ」づくりの流れ

3.2.4.2 マップづくりで伝承し続ける

それでは、伝承という観点からどのようにマップづくりを行うのか、またそれによってどのような効果が期待できるのか確認したい。

ⅰ)震災の教訓を伝え続け、命を守る行動につなぐ

たとえば、村歩きをする前に「避難場所を探す」や「どのようなルートが使えるか」などのテーマを決める。その後、村を歩きマップ作りに取り組む。

さらに、こうして出来上がったマップを先生や友人、家族などと共有すれば、「震災の教訓」だけではなく、災害に備え「ピンポイントで避難する場所」について確認することにもつながるのではないだろうか。

このように、村民自身がマップ作りに参加することで、震災の教訓を伝え続け、いかに「命を守る行動」をとるのかについて考えるきっかけになることが期待される。

ⅱ)村の誇りを発掘し、次世代へ伝承し続ける

村歩きのテーマとして、「村の歴史を調べる」や「村の好きなところを探す」というものも考えられるだろう。村の伝統でもあり復興の象徴とも言える「野田まつり」、震災後に結成された「荒海団」など、野田村の誇れる側面はたくさんある。

マップ作りをきっかけに野田村の人びと自身が村への関心を抱き、誇りを発掘し続けることで、復興や地域の活性化へとつながることが期待される。また、その際に、たとえば子どもたちの学習の一環として「村の大人たちに話を聞いてみる」という方法を提案すれば、世代間の交流も生まれ、村の誇りを次世代へ伝承し続けるきっかけの一つにもなるだろう。

最後に、作成したマップは「復興展示室」や「ほたてんぼうだい」に置いておくことで、村民が日常のなかで、震災の教訓や野田村の誇れる側面を再確認する機会を生みだすことにつながるかもしれない。それだけでなく、村民がどのような思いで復興に力を注いできたのか、また野田村の誇れる側面や魅力などについても、観光客がそれらに触れることができる機会を提供することにつながるのではないだろうか。

3.2.5 のだむラジヲ

8月24日(土)の午前中、私たちは例年と同じように「のだむラジヲ」というラ

表5　ラジオ放送の概要

番組時間：2019 年 8 月 24 日（土）　10:30-10:50
ゲスト：吉田照夫さん
流れ：■　自己紹介
■　フィールドワークの概要と報告
■　吉田照夫さんの思い
■　「野田祭り」の昔と現在
■　吉田さんからみた伝承
■　吉田さんのリクエスト曲：美空ひばり「真っ赤な太陽」

ジオ放送を作成した。前日報告会の後、私たちは朝日放送の戸石伸泰さんの講義を受け、放送番組の基礎知識を学んだ。ラジオ放送の経験がない私たちは、不安を抱えつつ準備を始めた。

この数日間、たくさんの方とお話することができ、胸が熱くなる瞬間も少なくはなかった。このような話と私たちが感じたことを野田村の方々に伝えたいと考えた。

ラジオには吉田照夫さんをゲストとして招くことができた。吉田さんは、「野田村は何もない村じゃない」と語り、村の子どもや若者には、村の歴史、村への愛着、誇りを持って欲しいという想いを伝えてくれた。

様々な視点・立場から考えなければならない「伝承」というテーマの意味を、私たちは今後も自問し続けることになるであろう。

3.2.6 おわりに

私たち伝承班の提案は、あっと驚きを与えるものでも、優れたものでもないかもしれない。また、野田村の人びととの出会いの中で多様な話を聞いたにもかかわらず、そのすべてをこの報告書のなかに反映することができたとも言い切れない。

しかし、今回私たちは「復興マップ」を、単なる「調べ学習」や「震災の教訓」を伝承するためだけの手段として提案したつもりではない。

「復興マップ」が、村の歴史を知り、誇りを発掘・蓄積し、時には人の関りやつながりを生むための仕掛けとなり、未来の野田村の人びとが、例え震災など想定外のことに直面しても力強く歩みを進めるための一助となることを強く願っている。

表6　トレイル班活動概要

日程	時間	場所	内容
8月18日	午前	三陸鉄道	震災学習列車
	午後	野田村トレイル	トレイルウォーキング
8月19日	午前	久慈広域観光協会	貫牛さんインタビュー
	午後	トレイルスタンプラリー設置要点	商店の方々へインタビュー
8月20日	午前	野田村役場未来推進課	廣内さん・北田さんインタビュー
	午後	八戸種差海岸 インフォメーションセンター	施設スタッフ・観光客インタビュー
		交流センター	八戸工業高等専門学校 河村先生インタビュー
8月21日	午前	野田村トレイル	トレイル沿いの商店街 インタビュー
	午後	野田村役場	小野寺さんインタビュー
8月22日	午前	野田村中学校	續石先生インタビュー
	午後	交流センター	のだむラジヲ準備
8月23日	午前	野田村祭り会場	のだむラジヲ本番
			野田村祭り参加

3.3 トレイル班

3.3.1 みちのく潮風トレイル概要

「みちのく潮風トレイル」は青森県八戸市から福島県南相馬市の太平洋沿岸部をつなぐ全長1000kmにも及ぶ日本最大のロングトレイルで28の区間からなり、各エリアによって様々な表情を私たちに見せてくれる。本トレイルは環境省の「グリーン復興事業」の一環として整備されており2019年6月9日に全線が開通し、今回私たちが訪れた野田村にも「野田村～普代村北部エリア」として開通している。本トレイルの魅力として、環境省は「自然が作り出した景色」「東北に住む人々との交流」「自然の脅威・津波の痕跡」「東北の暮らしが育んだ歴史と文化」「自然の恵みがくれた山海の幸とご当地グルメ」を挙げている。情報拠点として青森県八戸市に「種差海 岸インフォメーションセンター」を擁し、トレイルマップの配布

や、トレイルの自然や暮らしの情報を発信している。

3.3.2 活動概要

私たちの班はトレイルが現在どのように利用され、またそれらを踏まえて、野田村の復興においてどのような活用の可能性があるのかを見出すことを目的に活動を展開した。そのために、私たちは実際にトレイルを歩き、その道中に出会うハイカーの方や近隣住民のかたにインタビューを行い、現状に対する生の声を収集した。具体的なエリアとしては情報拠点である「種差海岸インフォメーションセンター」やトレイル沿いの商店やタバコ店などである。また、加えてトレイルのこれまでの活用事例を知るべく久慈観光協会の貫牛利一さんや村役場の廣内鉄也さんと北田圭太さん、小野寺修一さん、そして野田村中学校の續石真司さんや八戸工業高等専門学校の河村信治さんといった方々お話を伺った。表6に活動のスケジュールを記す。

3.3.2.1 フィールドワークで分かったこと

フィールドワークを通して私たちは「五つの気づき」を得ることができた。まず一つは自分たちの持っていたトレイルに対する考え方と、村民の方々が持っていたトレイルに対する考え方の違いである。当初私たちは「いかにして、トレイルを観光面で活用できるのか」を念頭に置いて、事前に情報収集を行なったりトレイルを歩いたりした。しかし、野田村でトレイルに関わる方々はトレイルを観光のために活用したいという気持ちよりも、まずは村人たちがトレイルを歩くことを通して、もう一度野田村の良いところを発見して欲しいという気持ちが大きいということを知ることができた。二つ目の気づきは「標識の数があまりに少なく、また目立たないため迷いやすい」といった課題である。実際、わたしたち自身、トレイルを歩いた際には地図を見ているにも関わらず道に迷うことが度々あった。この経験から、トレイルの標識があまりに少なく、また目立ちにくいためではないか（写真4）という仮説を私たちは立てた。三つ目の気づきは「近隣住民の方の認知や関心の度合いが低い」といった課題にも直面した。これはトレイルに面している民家にお住まいの方にトレイルについて伺ったところ、「ハイカーらしい人は見かけるが、何をしているのかは知らない」という証言をいただいたことによるものである。四つ目の気づきは「野田村にはかつて歩く文化があった」ということである。村役場の小野寺さんのお話によると、30年ほど前は「塩の道」

という道を老若男女問わず歩き、催し物を開催していたという。塩の道とはかつて野田村で生産された塩を盛岡まで運ぶために使われていた山道であり、みちのく潮風トレイルが沿岸部を通る道であるのに対して、塩の道は海辺から内陸地へつながる道である。この証言から、野田村には村人から愛される道があり、その道を歩くという文化があったことがわかった。五つ目の気づきはハイカーの少なさについてである。実際にトレイルを歩いたが、結局ハイカーの方々に遭遇することはできなかった。また、三陸鉄道車内においてハイカーの方に遭遇したため、お話を伺ったが「野田村のあたりには何もないから行かない」とのことであった。これらの現状に加え、「野田学」の講演会にて、室崎先生がおっしゃった「復興とは人々が誇りを持って自慢話ができるようになることである」というお話を踏まえ、私たちは先述の現状を改善するとともに村の方々がトレイルに誇りを持ち、自慢話ができるようになる施策を打ち出すという方針を固め、以下の提案を行うに至った。

写真４　トレイルの標識

3.3.2.2 はまなすプロジェクト

上記の課題を解決するためのプロジェクトとして私たちは「はまなすプロジェクト～野田の自慢話をしよう～」を提案した。「はまなす」とは村花で「旅の楽しさ」という花言葉を持つ花であり、旅人などの訪問者と村民の方々の出会いを包摂する本プロジェクトとマッチしていると考え、命名に至った。また、シンボルマークの形は人と人との繋がりを意味しており、また私たち未来共生プログラムのレインボーカラーの配色とすることで、トレイルに様々なバックグラウンドを持つ人々と出会い、共に生きていくための道となって欲しいという願いを込めてデザ

インしている。はまなすプロジェクトは大きく二つのコンテンツから構成される。一つは「はまなす隊」である。はまなす隊は、八戸の「はしかみエンジェル」というガイドをモデルにしており、このガイドは従来の形式ばったガイドとは違い、迷っている訪問者に道案内をしたり、挨拶をしたり、自宅のトイレを貸したりといったカジュアルなおもてなしをするボランティアガイドである。この仕組みによって、野田村の子供達をはじめとした若年層の野田村の魅力を知ろうという動機を創出するとともに、村の大人たちに「語り部」としてはまなす隊員の教育を担っていただくことによって、そうした人々の魅力の再発見の効果も期待している。もう一つのコンテンツは「ねまるチェアー」である。はしかみエンジェルは自分たちがはしかみエンジェルであると周知するために、軒先にタペストリーを吊るしているのだが、私たちは代わりに「ねまるチェアー」という椅子を置くことで、歓迎感を演出するとともに、より交流の機会を増やしたいと考えている。訪問者はねまるチェアーの設置された店や民家の方々に道を聞いたり、時にはトイレを借りたりすることが可能であり、さらにその椅子に座って、はまなす隊の方々との交流を行うことが可能である。また、このねまるチェアーを各ポイントに配置することで、標識としての役割も担うことができる。

図２　はまなすプロジェクトのロゴ（瀧尻創作）

3.3.3 潮風トレイルリレーとまいとれいるアルバム

私たちは「はまなすプロジェクト」に加え、「潮風トレイルリレーとまいとれいるアルバム」を提案した。これは「潮風トレイル」が青森県八戸から福島県南相馬まで続く一本の道であるという特性を生かしたいという思いがあったことによるものである。「潮風トレイルリレー」とはみちのく潮風トレイルを校区に含む小中

学校の生徒たちが、自分たちの校区のトレイルを歩くというものである。ひとくくりに東北と言っても地域ごとに被災の状況も違えば、復興に対する想いも一人一人違うだろう。そういった一人一人の想いをバトンでつなぎながら、一つの「道」を紡ぐことはできないだろうかと私たちは考えた。この企画を通して、多様な想いがあることに気づくと同時に、東北としての繋がりを見いだせればと考えている。「まいとれいるアルバム」とは潮風トレイルを「異なる人々がバトンを繋いで紡ぐリレー」であるに対して「一人の人が時間をかけて紡ぐリレー」を想定している。つまり過去と現在、未来の自分をつなぐ「時空を超えたバトン」である。アルバムのはじめは青年一人の写真だが、回を重ねるごとに夫婦二人になり、家族が増えていく様子を記録できる仕組みになっており、旅の思い出を記録するという役割だけでなく、家族史としての機能を期待している。

3.3.4 のだむラジヲ

上記の活動の報告会が終わり、私たちはラジオの準備を始めた。はじめてのラジオ放送ということで緊張しながらも、ここまでお世話になった野田村の方々に何を伝えようか真剣な話し合いが続いた。話し合いを通して、「歩くことによって生まれる交流を通して、野田村の魅力を再発見し、村民全員がガイドになれれば……」というメッセージを伝えようということになった。ゲストには塩の道歩こう会の小野寺修一さんをお招きした。ラジオ概要は以下に記す。

前日の報告会で提案した「はまなすプロジェクト」について改めて説明させて頂き、小野寺さんや戸石さんからコメントを頂いた。プロジェクトの説明は、「歩くことによって生まれる交流を通して、野田村の魅力を再発見し、村民全員がガイドになれれば……」という私たちのメッセージが伝わるよう特に想いを込めた。

表7　ラジオ放送の概要

番組時間：2019 年 8 月 24 日（土）　11：00 ～ 11：20
ゲスト：小野寺修一さん
流れ：■　フィールドワークで学んだことの報告
■　小野寺さんのお話：塩の道について
■　「はまなすプロジェクト」についての説明
■　活動全体の感想
■　小野寺さんのリクエスト曲：FLYING KIDS「幸せであるように」

3.3.8 考察

このフィールドワークを通して、私たちは、村に誇りを持つことが復興に繋がるのではないかという一つの結論にたどり着いた。東日本大震災復興対策本部は、復興期間は10年とし、5年間を「集中復興期間」と定めている。東日本大震災から、9年が経とうとしている現在の村の様子は、津波被害が甚大だった区域には、都市公園が整備され、沿岸には巨大な防潮堤が整備されるなど、一連の復興事業は完了しているように見えた。しかし、村の再整備が完了したといって、それがイコール復興ではないと私たちは考えている。震災前とは変わり果てた形で村の復興は進んでいる。そのことに胸を痛める村民もいるに違いない。しかし、その中には震災後も変わらない村の魅力や、震災があったからこそ生まれた新たな魅力があるのではないだろうか。その魅力に野田村の人々が気づき、野田村を誇りに思うこと、それこそが真の復興に繋がっていくのではないかと私たちは考えている。

4. 全体考察―野田村の復興を考える

私たちは今回、「観光」「伝承」「トレイルの活用」の三つのテーマ別の班に分かれ、9日間に渡るフィールドワークを行ない、野田村の多くの方々から貴重な話を聞くことができた。その内容は班ごとに様々であったが、どの話にも「村の誇り」を大切にしたい、残していきたいという共通したキーワードが根底に存在しているように感じられた。

かつての野田村は誇りに満ちていた。例として、様々な年代の方々が参加する塩の道を歩くことを通じて村の魅力に触れるイベントが催されたり、災害にまつわる伝承として愛宕神社の霊験あらたかな言い伝えが残っていたりすることが挙げられる。しかし、こういった誇りを生み出すコンテンツは人口減少や災害によって失われつつある。

震災から9年が経とうとする中で、震災の記憶は少しずつ過去のものへとなりつつある。大きな被害を受けた村も今では多くの建物は建て直されており、村の姿は新しく生まれ変わることとなった。しかし、復興とは家屋やインフラが整備されることを指すのであろうか。私たちは、地元の人間が地元の魅力を再確認し地元に誇りを持てるようになることが真の復興だと考えている。今まであった当たり前の景色が全く違うものへと変わり、もう二度と昔に戻ることはできない。

それでも生きていかなればならない。村に残った人々は様々な感情を持ちながら懸命に生きていかなければならない。

震災で失ったものは数えきれないが、残ったものも数多くある。毎年行われる野田村祭りでは、震災以前は上組・中組・下組に別れて、山車が引かれていた。震災によって下組の地域は大きな被害を受け、祭りの存続も危ぶまれたが、その文化を断絶しないためにも住民は立ち上がり、少ない担い手でも祭りを継続させた。このエピソードにおける住民の「山車」への熱い想いこそが「村の誇り」であり、この「村の誇り」が今後の野田村の復興においてキーワードになるのでないかと私たちは考えた。野田村の人々が外からの刺激を受けながら、野田村の魅力を再確認し、村に誇りを持つこと、そしてその魅力が村内外に広がり、人の繋がりがあふれる村になること、それが私たちの描く復興であり、その想いが各提案に込められている。

トレイル班ではトレイルを通じて世代間でのコミュニケーションや外の訪問者と関わることによって、村の誇りを再発見することができるのではないかと考えた。観光班では同様に村の良さを再認識することが観光客を増やすポイントとなった。そして、伝承班では再三震災の被害を受けても、何度でも立ち上がる村の強さを未来へ伝承するための方策が考えられた。これらの提案に共通していることは、野田村の魅力を再発見し、誇りを強く持ち、そのことを村の内外に発信していくことの重要性である。私たちの提案はあくまでも「トレイル」「伝承」「観光」と言ったテーマに沿った提案で限定的なものかもしれない。実際、今回私たちが提案させていただいた提案以外にも様々なアプローチがあるだろう。しかし、この「野田村の誇り」というキーワードは野田村の復興において重要なキーワードであると私たちは考えている。

5. 野田村と私たちのこれから

昨年からコミュニティ・ラーニングは未来共生博士課程プログラム（未来共生）を含む人間科学研究科の学生全体に開かれるようになった。未来共生6名と未来共生以外の3名の参加を得て、学生9名が野田村を訪問することとなった。この9名で野田村の「復興」の意味を考え調査活動を行い、それを報告書にまとめた。

大学の学生たち及び先生だけではなく、村民の方々とは今回の活動の当初から絆を結び、活動を通して最後まで絆をさらに深めていった。

今回の活動のまとめをしつつある今、大阪大学の私たちは、今後も長期に渡るかかわりを続け、村民の方々に寄り添っていきたいと考えている。野田村と遠く離れていても、心はいつも野田村と一緒であり、折に触れ交流を続けていきたい。

建物や線路などハード面での復旧・復興が進み、以前の生活が戻りつつある。しかし、心に残る震災の爪痕は消えていない。野田村のソフト面での復興については、まだまだこれからの課題が残っている。私たちは「人とつながる暮らし、自然とつながる暮らし」を、野田村のソフト面での将来に向けた復興の方向と考えたつもりである。

復興を進めながら、さらに野田村の資源を生かし、村民のニーズを踏まえ、にぎわいと活力を生み出すことで復興を果たしていく。今回のフィールドワークを通して、私たちの提案が復興に貢献ができれば幸いである。

しかし、復興という目標にたどり着くにはまだまだ長い道のりが残っている。まもなく震災から9年を迎える中で、ハード面での復旧・復興が進んできた。ここから先の課題は、心の問題であり、目に見えないだけに非常に難しい。ハード面だけの復旧・復興に終わってしまうことがないように、ソフト面の課題を明らかにすることでソフト面の復興に、これからも貢献したいと考える。

謝辞

私たちの9日間の生活は、プログラムの先生方はもちろんのこと、多くの方々に支えられたものでした。それぞれ深い感謝の意を表します。

活動中大変お世話になった皆さまには、以下に記すことでお礼にかえさせていただきます。皆さんお忙しい中、温かく受け入れてくださり、充実した活動を送ることが出来ました。本当にありがとうございました。

突然の訪問にも関わらず復興展示室でお話ありがとうございました
上山晃さま

様々な差し入れ感謝申し上げます
小野寺健二さま

塩の道歩こう会のお話大変参考になりました
お忙しい中ラジオ出演もして下さった

小野寺修一さま

おいしい郷土料理ありがとうございました
小野寺信子さま

トレイルを歩かれた経験大変参考になりました
発表に関しても様々なアドバイスありがとうございました
河村信治先生

9日間の生活をサポートして下さりありがとうございました
貫牛利一さま

突然の申し出にも関わらずお話し頂き本当にありがとうございました
神先真さま

トレイル活用について、観光についての貴重なお話ありがとうございました。
北田圭太さま

震災学習コースのお話は大変参考になりました
北田晴子さま

野田学での貴重なお話、そして懇親会でもありがとうございました
小林郁雄先生

おいしいコーヒーとお菓子ありがとうございました
野田村についてたくさんお話し下さった
佐々木陵太さま

お忙しい中何度もお話し頂きありがとうございました
島川英知さま

授業の合間を縫ってお話しいただきありがとうございました

續石真史さま

ラジオのいろはをご教授頂き、トーク力で私たちを引っ張って下さった
戸石伸泰さま

お漬物やエビ、焼き鳥どれも絶品でした
中村タツ子さま

お忙しい中何度も時間をとってお話し頂き本当にありがとうございました
懇親会では皆さんとお話しできて有意義な時間となりました
野田村役場の皆さま

震災学習列車でのお話胸に残っています
畑田健司さま

営業中に突然伺ったにも関わらず受け入れて下さりありがとうございました
パティオ・ムラタさま

野田村のおいしいもの教えて頂きありがとうございました
平谷東英さま

お忙しい中何度もお話し頂きありがとうございました
廣内鉄也さま

作品の数々感動しました
深渡栄一さま

お忙しい中何度もお話しいただきありがとうございました
手ぬぐい大切にします
貳又正貴さま

スイカおいしく頂きました
前田豊さま

「誇りを持つことが復興に繋がる」というお話大変参考になりました
室崎益輝先生

震災ガイド・ラジオ出演本当にありがとうございました
吉田照夫さま

はじめて食べた豆腐田楽の味は忘れられません
安来さま

引用文献・参考文献

岩手県政策地域部
2018 「岩手県人口移動報告年報」18頁

岩手日報
2017 「大津波7000年で18回？　野田の堆積物から推定」(2月21日)

岩手県ホームページ
2019 「岩手県内の過疎市町村(過疎マップ)」「地域支援制度」
https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/chiiki/shien/1004708.html
(2019年9月21日最終アクセス)

大阪大学未来戦略機構第五部門
2017 『東日本大震災被災地復興フィールドワーク報告書2016』
2018 『東日本大震災被災地復興フィールドワーク報告書2017』
2019 『東日本大震災被災地復興フィールドワーク報告書2018』

国土交通省観光戦略課観光経済調査庁
2017 「平成29年訪日外国人消費動向調査」
https://www.mlit.go.jp/kankocho/news02_000346.html
(2019年11月29日最終アクセス)

総務省ホームページ
2019 「平成31年度1月1日住民基本台帳年齢階級別人口(市区町村別)」
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/gaiyou/pdf/1s1s.pdf
(2019年9月20日最終アクセス)

内閣府ホームページ
2019 「令和元年版高齢社会白書（概要版）」
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/gaiyou/pdf/1s1s.pdf
（2019年9月20日最終アクセス）

野田村観光協会
2019 「愛宕神社例大祭　野田まつり」
http://www.noda-kanko.com/event/nodamaturi.html
（2019年9月20日最終アクセス）
2019 「景勝地・観光」
http://www.noda-kanko.com/kankou/spot/
（2019年9月20日最終アクセス）
2019 「震災ガイド」
http://www.noda-kanko.com/kankou/guide/shinsai-guide.html
（2019年9月20日最終アクセス）

野田村津波記念碑建立実行委員会
2018 「東日本大震災大津波記念碑」

野田村役場野田村観光協会
2015 「岩手・野田村　震災の記録」
http://www.vill.noda.iwate.jp/bosai/image/4867download.pdf
（2019年9月20日最終アクセス）
2019 「野田村村勢要覧」

野田村役場ホームページ
2019 「野田村の歴史・旧跡」
http://www.vill.noda.iwate.jp/syougaibunka/309.html
（2019年9月20日最終アクセス）
2019 「愛宕神社」
http://www.vill.noda.iwate.jp/syougaibunka/image/1913download.pdf
（2019年9月20日最終アクセス）
2019 「無量山小松寺海蔵院」
http://www.vill.noda.iwate.jp/syougaibunka/image/1914download.pdf
（2019年9月20日最終アクセス）
2019 「御台場」
http://www.vill.noda.iwate.jp/syougaibunka/image/1916download.pdf
（2019年9月20日最終アクセス）
2019 「野田村津波・土砂防災マップ（2015年版）」
http://www.vill.noda.iwate.jp/syomubousai/image/352download.pdf
（2019年9月20日最終アクセス）
2019 「野田村復興むらづくり計画－津波防災対策と魅力・活力創出にむけて－」
http://www.vill.noda.iwate.jp/zkeikaku/image/8308download.pdf

（2019年9月20日最終アクセス）
2019 「平成28年台風10号に伴う被害状況等について」
http://www.vill.noda.iwate.jp/bosai/image/3368download.pdf
（2019年9月20日最終アクセス）
2019 「野田村復興記録誌」
http://www.vill.noda.iwate.jp/kakusyukouhyou/image/8309download.pdf
（2019年9月20日最終アクセス）

村橋克則
2019 「『観光』は地域における『共生』の推進力になり得るか？」
https://chikouken.jp/report/9522/
（2019年10月31日最終アクセス）

Weather News
2016 「Wx Files Vol.35」
https://jp.weathernews.com/wp-content/uploads/2016/09/20160905.pdf
（2019年10月31日最終アクセス）